

ヴァージニア州アーリントン 水曜日朝

カーテンの細い隙間から差す陽光が、大型ソファで眠る男の裸の胸を、暖色のストライプに染めている。片脚が肘掛けにかかり、もう片方は夜のあいだにソファから落ちて、床のカーペットの上にある。彼の眠りは浅かった。悪夢にうなされ、ときおりびくりと筋肉が痙攣した。

髪は長くて黒い——その髪も、顔の下半分を覆う髭も、ぼさぼさに乱れている。だが、寝ているあいだも腹に拳銃を置いて離さないことから、彼の精神状態は容易に知れた。

遠くで響くサイレンが、夜明けのしじまを破った。男の眉間に皺が寄る。サイレンが夢に入り込んで、よみがえる地獄に生々しい音が加わったのだ。

真っ白ないんこが、ハシエンダのベランダに立つジョーナ・スレイドの視界を横切った。骨の髄までしみるような暑さだったが、コロンビアの奥地へ来てすでに半年。よほどのことがない限り、もう動じなくなっていた。

「ジャニート！」

潜入捜査のための偽名にもとうに慣れていたから、ジョーナはすぐに振り向いた。

「はい、パドローネ？」

ミゲール・カルデロンがフランス窓からベランダへ出てきた。日頃の尊大さも影を潜めるほど慌てふためいている。

「侵入者だ！」両手を振り回して、カルデロンは天を指さした。

ジョーナは湧き上がる興奮を抑えて上空を振り仰いだ。カルデロンのハイテク・レーダーが信用できるとすれば、侵入者はジョーナの知っている者たちのはずだった。メッセージが正確に届いたのだと思うと、喜びが込み上げる。ジョーナの正体はじきにはれるだろうが、とりあえず今はほかの連中と一緒に逃げたほうがいい。彼はライフルを抱えると、カルデロンの手下たちとともに避難場所へ走った。

カルデロン本人はまるでブルドッグだった。太くて短い脚であたふたと駆け回り、英語とスペイン語をごっちゃにして指示の言葉をわめきたてる。彼の息子は二人ともすでに屋上にいた。ほかに射撃の名手が十数人と、バズーカ砲が半ダース。打ち上げを待つ七月四日の筒型花火のように屋根の上に並んでいる。

ジョーナは、装飾的な鉄製の目隠しの陰に隠れた。ここからなら、空だけでなく、潜んでいる男たちの様子もよく見える。ライフルの床尾を腹に押し当ててしゃがみ込んだ彼は、頭の周りを飛ぶ黒い羽虫に小声で毒づいた。これから起きる事態を思うと、うなじのあたりが硬く張りつめ、みぞおちが締めつけられた。この感覚が心地よいと思っていた頃が確かにあった。だが、今は違う。潜入捜査をずいぶん長くやってきた。長すぎた。あるいは、

年を取ったのか。子どもの頃は、警察役と泥棒役に分かれる鬼ごっこが大好きだった——それもあってこの仕事を選んだのだ。けれどもジョーナはもはや子どもではなかった。そろそろ潮時だ——この組織を司法の手に委ねたら、みずから望んで続けてきた孤独な日々

に、終止符を打とう。
へりコプターが近づいてきた。ジョーナはわれに返り、そして、身構えた。

枕元まくらもとでたたたましく鳴り続ける電話の音に、ジョーナは頭をもたげ、スペイン語で怒鳴りながら銃を構えた。素早く周囲を見回す。ここはコロンビアだ。銃撃戦はまだ続いており、ズボンにはダニー・コーデル捜査官の飛び散った脳髓が付着している。アレハンドロ・カルデロンの眉間を撃ち抜いたライフルの反動を、この手に確かに感じている。アレハンドロがあんなことをしたから撃つたのだ。カルデロンに一部始終を見られていたと気づいたときはあとの祭りだったが、そのカルデロンも、今はDEAに身柄を拘束されている。

マンシヨンの自分の部屋にすることがはつきりすると、ジョーナは寝返りを打って電話を見た。まだ鳴り続けている。誰からであれ、今は人としやべる気になれなかったから、留守番電話に任せて彼は部屋を離れた。

自宅へ戻ってから、キッチンへはまだ二度しか足を踏み入れていなかった。カウンターのコーヒーポットだけに気を取られていたジョーナは、突然立ち止まった。何か固いものを踏んだのだ。しかめっ面で腰をかがめ、足の裏を探ると、引つかかるものがあった。親指のつけ根から、固い粒状のそれを取った。
「なんだ……？」

肉に食い込んでいたのは、干からびた米粒だった。帰宅してまだ丸一日たっていないのだから、少なくとも半年はここに落ちていたことになる。椅子やテーブルにはうつつすら埃が積もっているし、玄関の床には、ドアの郵便受けから投げ込まれたダイレクトメールが山になっている。主な支払いは銀行為替手形でなされるよう、ずいぶん前に手続きをしてあった。いつ留守にしても不都合のないようにだ。けれども家の掃除に関しては、留守中、他人に入られることに抵抗があった。こうして戻ってきたからにはいつハウスクリーニングを頼んでもいいのだが、とりあえず今は、何よりもコーヒーを飲みたい。

ジョーナは米粒をシンクに放ると、コーヒーポットに水を満たして冷蔵庫を開けた。コーヒー缶が空だとわかると、はつきり聞こえるほどのうめき声が漏れた。

「ちくしょう」彼は眩き、扉は眩くらきつけるようにして冷蔵庫を開めた。それから小さな食品貯蔵庫へ向かった。わずかながらストックしてある缶やら箱やらを引っかかり回した果てに、インスタントコーヒーの小瓶を見つけ出して、ようやく彼は息をついた。ちょうど一杯分ぐらいはありそうだった。湯を沸かすのもどかしく、持っている中で一番大きなカ

ップに粉を入れると、熱湯を蛇口から直接注いだ。手早くかき混ぜ、夢中で一口飲んだ。うまくなかった。熱くさえなかった。それでもカフェインが入っているのは確かだし、今日一日をしのぐのに必要な程度にはコーヒーマグの味もした。

ジョーナは満足の吐息を漏らして首を回し、肩の凝りをほぐした。そのあとバスルームへ向かうあいだも、カップを手放さなかった。

シャワーブースから出るときに、鏡に映る自分の姿が目に入った。ジョーナは足を止めて鏡を見た。両腕が体の脇に垂れ、片方の手からタオルがぶら下がるのにも気づかないまま、彼は鏡の中の男をじっと見つめた。シヨックだったのは、見苦しい髭でもむやみに長い髪でもなかった。潜入捜査のために外見を変えるのはいつものことだ。だが、この目の無表情さはどうだ。

燃え尽きている。

他人のこんな目ならこれまでにも見てきたが、彼自身がそうなったことはなかった。ジョーナは眉をひそめて後ろを向くと、コーヒーマグに手を伸ばし、生ぬるい液体の残りを腹立ちに任せて飲み干した。飲み終わると、鏡の下の戸棚を開いて錠薬を取り出し、髭を切りにかかった。ほどなく、すっきりと髭を剃り髪をポニーテールにまとめたジョーナが、バスルームから出てきた。腹が食べ物を求めて鳴っていた。昨日、上官への報告を終えた彼の頭に、買い物をするという考えは浮かばなかった。まっすぐ帰宅して鍵を閉めるなり、

ベッドルームへもたどり着かないうちにソファで眠り込んだのだ。それぐらい疲れていた。自分で認めたくはないが、仕事以外の場面で彼は、人間らしい生活から離れがちどころがあった。

しかし人間として生きていくのであれば、食べなければならぬ。つまり、近くのデニーズへ行つて朝食をとり、その先のスーパーで買い物をしなければならない、ということだ。記録的な速さで身支度を終えたジョーナは、玄関脇の小さなテーブルから車のキーを取り上げた。出なかった電話のことを思い出したのはこのときだった。点滅する留守番電話のランプを眺めながら、放っておけと自分に言い聞かせた。だが、政府の命令に従う生活が長すぎたのか、せめてメッセージを聞くだけは聞かないと出かけられなかった。それに、カールからかもしれない。カルデロン逮捕に協力するためヘリから飛び降りてきたカールの顔。半年ぶりにあの笑顔を見たときには、心から嬉しく思った。今、あいつはどうしているのだろう。気になるが、わざわざ電話をかけるほどでもない。ジョーナは再生ボタンを押した。聞き覚えのない女性の声流れた。

「わたしが失ったものを、おまえも失うだろう」

つかの間、心がざわついたが、すぐにジョーナは肩をすくめ、不安を払った。わけのわからないメッセージにはかまわず、キーを握つて外へ出た。ただでさえ善良な市民は電話セールス攻めに困っているというのに、宗教までが仲間入りか。テレビ伝道師が電話で布

教を始めたなら、世も末ではないか。

三時間後、マンションの駐車場まで帰り着いたジョーナは、食料品の入った袋を両腕に抱えて車から降りた。ポニーテールは消え、五センチそこそこの短髪に変わっている。髪型を変えればこの六カ月に別れを告げられるかと考えたのだが、事実、建物の入口へ向かう彼の足取りはずいぶん軽くなっていた。

玄関近くまで来て初めて、行く手に女性が一人たたずんでいるのに気づいた。ジョーナは足を止め、彼女が道を空けるのを待った。彼女はそうするかわりにジョーナの名前を呼び、こちらへ向かって歩き出した。

メイシデイス・ブレインは恐れていた——これほど何かを怖いと思ったのは生まれて初めてだった。最後にジョーナ・スレイドに会ったとき、彼女は十二歳だった。実家の表階段を駆け下りながら、行かないでと彼に懇願した、あのとき。量の多い赤毛は手に負えない癖毛だったし、歯には矯正器具をつけていた。ひよろりと背ばかり高くてみっともなく、そしてジョーナのことが好きで好きでたまらなかった。姉のフェリシテイ以外、彼の目には入っていないというのに。

それも当然だった。二十四歳のフェリシテイは輝くばかりの美しさだった——抜けるような白い肌に見事なブロンド。そして、十二歳のメイシーが憧れてやまない完璧な歯。

けれどあの日、何かが起きたのだ。そのせいで、ジョーナは去っていった。父と姉が巡らせた策略をメイシーが知ったのは、あれから数カ月過ぎた頃だった。もはや手遅れだった。フェリシテイのおなかの子——ジョーナの子どもは墮胎されなかったと、今さら彼に告げることはできなかった。デクリン・ブレインはジョーナ・スレイドを追い払いたかった。そしてその思いを遂げた。フェリシテイは美しかった。それは間違いない。しかし彼女は、弱くもあつた。勘当だ、金はいっさい与えない、と父親から脅されただけで、言われるがままジョーナに嘘をつく、そんな弱い女でもあつたのだ。

父や姉が今回犠牲になったのは、あのときあんな嘘をついた報いかもしれない。そう思うと、恐ろしくてたまらない。せめてわたしだけは、できる限りの償いをするべきなのではないだろうか。

「ジョーナ」

彼は眉をひそめた。見たことがあるような気もするが、こんな女性に会えば忘れるはずはなかった。とびきりの美女だ——すらりと背が高く、優雅でありながら、あたりを払うような威厳ある歩き方をする。我を通すことに慣れている物腰だ。波打つ長い髪は、日差しを受けて、燃えたつ炎の色に輝いている。離れたところからでも、瞳が澄みきった緑色をしているのはわかった。

「不意打ちか」彼はそっけなく言った。「会ったことはないはずだが」

メイシーはふつと息を吐いた。「確かに年は十六年分とつたし、口の中になつぷり入っていたワイヤーはなくなつたけど、そこまでわたし、変わったかしら？」

ジョーナの心臓がびくりと跳ねた。十六年前？ いったい、どこで……？ そんな、まさか。

「メイシー？」

昔ながらのニックネームに笑みを誘われ、彼女はうなずいた。「そう呼ばれたのはずいぶん久しぶり。でも、今はなんだかそれがしつくりくるみたい」

「なぜ、ここに？」

「今、話せる？」

たちまちジョーナの警戒心が頭をもたげた。十六年前のメイシーはほんの子どもだったが、今はどこから見ても立派な大人の女性だ。つまりそれは、彼の経験からすれば、フェリシテイ同様、信用ならない相手だということの意味する。

「きみとぼくとで何を話すというんだ」ジョーナは彼女の前を素どおりして玄関をくぐつた。

メイシーは顔をしかめた。思ったとおりだ。一筋縄ではいきそうにない。でも、ここで引き下がるには、問題はあまりにも大きい。彼女はジョーナを追いかけて、ドアが閉まる寸前のエレベーターに飛び乗った。

ジョーナはため息をついた。かわいそうなことをしているのかもしれない。姉が何をしたいにしてもメイシーに責任はないのだ。

「いいかい、メイシーちゃん……」

「わたしはもう子どもじゃないのよ」

そう言われて、ジョーナはあらためて彼女を見た。成熟した女性の肢体をたつぷりと眺めたあと、真っ向から挑むような視線を顔に当てた。

「お願い、ジョーナ、どうしても聞いてもらいたいことがあるの」

「断る」

エレベーターのドアが開き、ジョーナは降りた。食料品の袋を抱え直して部屋へ向かう。メイシーがびたりと後ろについてくる。鍵を取り出すために袋を床に置いたとたん、彼女はジョーナの腕をつかんで強引に振り向かせた。

「聞かなきゃだめなのよ！ フェリシテイが死んだわ……殺されたの。父は重体、エヴァンは拉致された」

ジョーナの足の下で床が揺らいだ——少なくとも彼はそう感じた。メイシーの発した言葉は確かに聞こえたが、意味が理解できなかつた。フェリシテイが——死んだ？ あの美貌と高慢さが衰えることがあるうとは夢にも思わなかつた。ましてや、消えてしまふなどは。ジョーナはやつとのこととで呟いた。

「それは気の毒に。だが、ぼくには関係のないことだ」
メイシーは大きく息を吸った。簡単ではないけれど、言わなければならない。

「いいえ、関係あるわ。エヴァンのことがあるもの」

「エヴァン？ いったい誰なんだ、エヴァンって？」

「あなたの息子よ」

(この続きは、MIRA文庫『完璧な嘘』でお楽しみください)